とある科学の磁気単極《モノポール》

ぬぬぬぬぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の磁気単極（モノポール）

【Ｎコード】

Ｎ０６９２ＢＡ

【作者名】

ぬぬぬぬぬ

【あらすじ】

罪悪感を抱えながら生きている高校生、黒瀬和真。彼は周りの仲間たちとどのように、魔術と科学が入り乱れた世界を生きていくのか。※科学的（物理的）におかしいところがあるかも知れませんが、スルーして頂ければ幸いです。

第一話　逃走

「あーもうちくしょー不幸すぎますーっ！」
「一番不幸なのは巻き添えくらってるオレだ！っていうかお前とこの地球上の七十億分の一の確率で出会ってしまったこと自体が不幸だ！」
「何だその現実的でありながらもロマンチックな不幸は！？っていうかそれ友達にかける言葉か？」

黒瀬和真は深夜の裏路地を走っていた。今日は七月十九日。夏休みに入ろうという、かなりテンションの上がる日のはずなのだが――

「いつオレがお前を友達と認めた？そんな覚えは無いんだが」
「何だと！？ならこっちもお前なんて友達とは認めねえ！ただの他人――」
「じゃあ僕関係ないんでこれで」
「待って下さい！私上条当麻が間違っておりました！だから戦前離脱はやめてください！」

この通り偶然会ってしまった友人と大規模な鬼ごっこをしている状況である。
叫び合って体力を消耗しながら、二人は熱気の漂う路地を走り続けた。程よく温まった体を汗腺から分泌される体液がじっとりと濡らし、目の周りを拭いながらも和真は走る。そして鉄橋のうえにさしかかった時――

「……？」

ふと和真は何かに気づき、不信な顔をして後ろを振り返った。明ら

かに追っ手の足音が聞こえない。当麻もそれに気がついたようで、
「おい和真、不良どもを撒いたんじゃないか？」
「ああ、確かに気配が消えたのは感じたが……ばてるにしてもタイミングが揃いすぎじゃないか？これは……？」
上条に次ぐ不幸体質の彼は、彼ならではの危機察知能力を働かせる。そして彼の予感は以外と鋭い。
「何やってんのよアンタたち。不良を助けて善人気取りか、熱血教師ですかぁ？」
逃げ場の無い鉄橋の上で、和真はうんざりとした表情を作る。そこには事の発端となった少女が腕を組んで立ち、アスファルトにへたりこんだ当麻と和真を見下ろしていた。恐らく不良たちは彼女に始末されたことだろう。
「いや……もしオレが熱血教師だったら不良たちよりお前を更正させたい」
「和真に同意だ」
不良十数人を何事もないような顔で撃退する少女には、少し教育的指導が必要だと和真は思う。
「当麻、こいつだろ？最近お前にケンカ売ってくるっていうビリビリ中学生は」
「ん？ああ、まあそうなんですが・・・」
「おい嬢ちゃん、自分の能力に自信があるのかは知らないが、こんな時間に外出歩いてんじゃねえぞ？そんなことをするから――」
「ハア？あんた誰に向かって言ってんのよ。私は不良の一人や二人

――」

「お前の心配なんてしてねぇよクソガキが。また同じパターンで当麻が巻き込まれに行くのを心配してんだ」

お前は普通にどうでもいい、と言い捨てる和真。しかし和真は少女の禁句ワードをルビつきで言ったことには気づいていない。

「だぁれがガキだっ！」

少女の叫びと共に撃ち出される槍状の電撃。それに和真はすぐさま反応し、唇をガリッ、と噛みながら防御の姿勢をとった。そう、完璧な防御を。

「上条バリアーっ！」

「え！？俺？」

和真の目の前に配置された当麻にズドン！と電撃が命中する。少女も手加減はしているだろうが、当たったら痛いとかそういうので済むレベルではないだろう。煙の中から出てくるのは当麻の気絶体か死体か……。

「……それ結局俺に当たった上に無事で済んでない状況だろーが」

「……で、やっぱりアンタは無傷なのね……」

素晴らしきかな上条バリアー。当麻は運良く電撃を右手でガードできたらしく、立っている顔は余裕そうに見える。実際の心境はどうかはわからないが。

「……ったく、盾にすんなら先に言えよな……まあそんなヒマなかったけどさ」
「悪い当麻。なんか反射的に――」
「お前は反射的に俺を身代わりにするんですか！？」
いやぁ悪い悪い、悪気は無いんだと頭を掻く和真と、悪気の無い方が怖いと顔を引きつらせる当麻。いまいち少女は空気である。
「それで？アンタはどんな能力なわけ？」
「何が？電撃を消したのはオレじゃないんだが」
訝しげに聞く少女に、和真はニコリとしながら聞く。
「何が？じゃないわよ。アンタ今、手も使わずに上条（そいつ）を自分の方に引き寄せたじゃない。念動力系の能力者？」
「はいはい、お前みたいなクソが七回ぐらいつくガキにまで教える程たいした能力じゃないからな」
教えてくれない上に（クソクソクソクソクソクソクソ）ガキ扱いをする和真の態度を見て、少女の血圧が再上昇を始める。そして頭の周りにはバチバチと電撃が走り、
「そう……話す気がないなら無理矢理吐かせればいいってわけね？いいわよやってやるわよ！」
ポケットから、ゲームセンターのコインを取り出す少女。それを見た和真は何かを思い出したようで、初めて彼女に意識を向ける。
「もしかして……学園都市3位の超電磁砲（レールガン）か？常盤台の？」
「どうした和真、そいつって有名な奴なのか？」

「お前知らないのか？超電磁砲と言えば学園都市に七人しかいない超能力者だぞ？それに第３位ときたら、確かコインを使って――」
「コインって言うと、今アイツが構えてるやつか？」
マジで？と顔を強張らせながら和真はゆっくりと振り向く。ニコっと笑う少女。また唇を噛む和真。
次の瞬間、オレンジ色の電撃が和真に襲いかかり、当麻はビームのように直進する電撃を見て息を飲んだ。和真はまた面倒そうに顔をしかめ、そこから一歩も動こうとしない。直撃する、と当麻は思った。
しかし
「――あれ？え？」
電撃は和真の少し手前で失速すると、そのまま消失してしまった。和真は面倒そうに飛んできたコインを掴む。空気摩擦で少々熱されたコインだ。
もはや弾であるコインは手で掴める程減速していた。
安心した表情を見せる当麻と、ふーっ、と息を吐く和真。そして――
「……何で？超電磁砲（レールガン）は５０メートルくらいは飛ぶはずなのに……」
目の前の光景に目を見張る少女。
レールガンの欠点の元になる、すぐに熔ける弾（コイン）も和真の右手に収まっている。なぜコインが熔けきったわけじゃないのにレールガンは消えてしまったのか？

納得のいかない少女に、和真は首の骨をゴキゴキと鳴らしながら説明を始める。

「うーん、と。お前のそのレールガンってのは平たく言えば電磁誘導、つまりローレンツ力を利用して打ち出されるモノだ。だからその磁力を止めてやればレールガンは撃てない、と思ったんだが……」

和真は手に持ったコインを見つめる。

「完全には磁力は抑えられなかったらしいな。まあ急に撃つもんだから、ちょっと反応が遅れたっぽい」

「……磁力を抑えるってどうやって――――――ってまさか？」

「まあお前は磁力線とかが見えるんだろ？ならオレがさっき当麻を磁力で引き寄せたのも見えたはずだ。これで納得か？」

しかし少女はまだ納得していないようで和真を睨み付けた。和真はまだ手のひらに載っているコイン凝視している。よく見ると、空気摩擦によって熱せられたコインは少し煙を発していた。

「……仮にアンタが磁力を操れる能力を持っててても、上条（そいつ）もアンタも鉄や磁石じゃないのよ？どうやってそんなこと……」

「ああ違う違う。確かにオレは磁力を操れるけど――」

いい加減熱っ！と和真はコインを投げ捨てる。

「モノに磁場を与えることもできるんだな、コレが」

呆然とする少女に、氷持ってない？と尋ねる和真。少女の好敵手が一人増えた瞬間だった。

第一話　逃走（後書き）

さて、主人公の能力。

あまり詳しくはありませんが、磁力を作るということは電荷の動きを作ること？だから一種の発電能力？

とも思いましたが、美琴のようなビリビリは出せないので磁力オンリー野郎と考えて頂ければ。

第二話　遭遇

「はぁ～……暑い……」

和真は部屋の中で悶えていた。暑い、というのは昨日の火傷ではない。部屋が、である。

「もしかして昨日の雷で家電逝っちまったか？」

呼びかけに反応を示さない冷蔵庫や電子レンジなど、そこらじゅうの家電に目を向ける和真。あのビリビリ中学生会ったらぶっ殺すとか思っていると、ふと自分の下の部屋の住人のことを思い出した。昨日、共に逃避行を繰り広げた友人だ。

「オレはレベル４だし金はあるけど……当麻は大丈夫かあ？」

ちょっと後で見に行ってみよう、と和真は同じ不幸仲間の当麻を心配する。

「とりあえず暑いから窓開けるか」

窓を開けてベランダに出る和真。目の前には東京都の西半分の広さを有する学園都市の街並みが広がり、ところどころに風車が並んでいる。

「（今日もいい天気だな……）」

目の前に広がる八階からの景色に和真は寝起きの目を細め、何となく壁に手をかけた。次の瞬間。

いきなり壁が崩壊した。勿論壁に手をかけていた和真は落下するしかない。八階のベランダから。

「ちょ、ちょい待てって！これは不幸ってレベルじゃない！ってい
うかまだこの小説始まったばっかなのにっ！？」

八階なんて高さから人が落ちたら、まず死は免れない。この状況で和真に残された手段はただ一つ。

「（当麻（ななかい）の部屋のベランダに乗り移るしかねえっ！）」

勇気を出して一、二、三！と実際は一秒も無い中和真は何とか七階ベランダの外壁に手をかける。軽く走馬灯を見た和真の目は涙目だ。この経験は誰かに自慢できそう、と思いながらも胸に手をあて生を実感する。

「……悪いな当麻。朝から騒がしくて――っ！？」

七階ベランダに乗り込んだ和真が見たのは、不幸そうな顔をした当麻だった。

そして隣には全裸の銀髪少女。

「……当麻が遂にやったか……」

「だー待て待て、俺は少女誘拐犯じゃない！てか『遂に』って何！
やる要素はあると思ってたんですか！」

必死の弁明を始める当麻。その横で涙目になっていた銀髪少女は、

一気に当麻の頭に噛みついた。

「当麻、弁護士は必要か……？」

「俺の味方はもう誰もいないのか！？……ってもう、不幸だぁーっ！」

☆

「んで？話をまとめると……」

当麻が朝起きた時、ベランダに一人の少女が干してあったらしい。純白の修道服に身を包んだシスターだ。因みにその少女はまだ当麻の頭に食いついている。

「そして事情を聞いたところ……」

彼女は十万三千冊の魔道書を持っていて、それを狙う魔術結社から逃げていた際背中を撃たれ、当麻のベランダに引っ掛かっていたという。かなりぶっ飛んだ話だ。

「そして魔術があるかないかの論争をするうちに……」

当麻の右手が彼女の修道服を破壊し、

「そのタイミングでオレが落ちてきた、と」

むう、と考え込む和真。三人の間に沈黙が流れる。そして和真はグッと拳を握りしめると――

「死ね当麻ぁっ！」

「何ゆえっ！？」

当麻に殴りかかった。

「何でお前はそんなラブコメイベントがホイホイ発生すんだっ！殺す！今日という今日はこのフラグメーカー野郎をぶっ殺す！」

「怒るとこはそこかよっ！」

嫉妬に燃えた和真の拳が当麻に襲いかかる。もともと身体能力が同じくらいなので、そこから二分にわたる決闘に決着はつかなかった。

そして――

「――ったく。お前は本当に不幸以外のモノも引き寄せるよな」

舌打ちをしながら、和真はインデックスと名乗る少女を見る。当麻のこういうところは昔からわかってるけどな……と、和真は諦めの姿勢だ。

「……お前はコイツの言ってること信じてんのか？」
「むー、まだ信じない！魔術はあるんだって！」
当麻はインデックスのことが信じられないようで、和真に少し困惑した顔で聞く。確かにこの科学の発展した学園都市でいきなり魔術やら何やらを信じろという方が無理な話だろう。案の定和真も、
「そんな話信じられるわけがないだろう。だが、お前の右手がその・・・なんだっけ」
「『歩く教会』だよ」
「そうそう、『歩く教会』を壊したんだろ？ならこの子が言ってる『魔術』って奴にも少しは信憑性が出てくるんじゃないか？」
「……まあなあ」
んー、と頭を抱える当麻を見て、和真はニッと笑みを浮かべる。そして――
「じゃあオレは自分の部屋に帰るぞ。よく考えたらお前補習があるもんな。その子の面倒、ちゃんと見てやれよ？」
「え？……っておい！さっきはあんなに怒ってたクセに、結局上条さんに一任ですか！？不幸は二人で分かち合おう！？」
「オレはそんなマイナスな関係は築きたくない」
当麻の制止を聞かずに、和真は走ってドアを開け逃げて行く。厄介事は当麻に任せた、といった格好である。
「へぇー、君とあの人との関係はあんなにドライなんだね？何かかっこいいかも」
「いや、いつもはもう少し協力的な奴なんだけど……何か用事で

もあんのか？」

残された当麻は少し疑問な表情をしていた。

☆

「さて、まず冷蔵庫がやられちまってるから食い物買いにいかないと……」

着替えをしながら和真は呟く。しかし頭の中に浮かんでいたのは、食べ物ではなくさっきの銀髪少女だった。何やら事情を抱えている顔・・・・あの笑顔の裏に何かありそうだよなぁ。と和真は思う。別に気にならないわけではない。だが・・・・・あの子はなんだか自分には救えない気がした。

ただの言い訳かもしれない。厄介事から逃げたいだけなのかもしれない。でも気がつけば自分はこの部屋に戻ってきていた。

「……当麻がいるし大丈夫だろ」

それでも当麻ならあの子を悪いようには絶対しない。そんな確信めいたモノはあった。

知り合ってまだ数ヶ月だが、それが和真が当麻に抱いている信頼だ

った。
きっと助けてやれるだろう。和真は自分より当麻を信じていた。
「……さて、行きますか――ってうわっ！」
考え事をしながら行動していたのが悪かったのか、ドアの前に落ちているバナナの皮に和真は気づくことができなかった。次に起きた出来事は言うまでもない。
「バナナって……いつの、ネタ……だ」
後頭部を強打したようで意識が遠のく。そしてそれから五分間のびていたのは、正直言えばいつものことだった。

☆

「何だ……？何コレ……」
和真は近くのコンビニに来ていた。眠気が抜けないからコーヒーでも飲もうかな―、なんて考えて飲み物売り場まで来てみたのだ――が。
「（何でいつも飲んでる種類のやつだけ売り切れなんだ？え、コレ

店員の嫌がらせじゃないよな？この前雑誌読むだけ読んで何も買わないで帰ったこと怒ってんの？）」

出かけて早々にちょっとした不幸に遭遇する和真。朝から数えてもう三回目の不幸である。今回も和真は数時間前に来た少年が大人買いをしていったことなど知る由もない。仕方がないので他の種類で代用する。

そうして店を出て口に缶をくわえながら歩いていると、今度は顔見知りとの遭遇である。今日は四連続不幸か？と和真は早くもくじけそうになった。

「あっ！アンタは昨日の！」

「昨日のビリビリ中学生か。今日も元気ビリビリだな。ところでうちの家電どうしてくれんだ？」

「元気いっぱいみたいに言うんじゃないわよ！アタシなは御坂美琴っていう立派な名前があるんだから！」

「悪いなビリー。ところでうちの家電どうしてくれんだ？」

「こん……のっ！」

どこか小馬鹿にするような和真の態度に美琴の血圧は上がりっぱなしだ。もう髪の周りにパチパチと音を立てているのは言うまでもない。ちなみに和真もさんざんスルーされて額には青筋が見える。

「ちょっとお姉様？この私を差し置いて、どこの殿方と話していらっしゃるのですか？」

「ああ、黒子。こいつよ、さっき話したムカつく奴」

「へ？ああ、さっき話していた殿方ですの？お姉様のレールガンを防ぎきったという――」

「何だ？今日は連れがいるのか？」

和真は美琴の数メートル真後ろにいる少女を見ようと首を伸ばした。
そして黒子と呼ばれた少女は和真の顔を見ようと体の位置を動かす。
そして両者とも、相手の顔を見た途端動きがピタリと止まった。

「黒瀬……和真……？」
「ああ、お前か。……久し振りだな、黒子」

その顔は、ただの古馴染みに会った表情にしては哀しすぎた。

☆

「（何？何よこの空気！ギッスギスじゃない！）」

美琴はかなり居心地が悪かった。なぜなら――

「「……」」

和真と黒子が、お互いの顔を合わせた途端、ぶすっと黙りこくってしまったからだ。いや、黙っただけなら良いが、和真はともかく黒子の顔にはありありと嫌悪がうかんでいるのである。重力が何倍にもなったような空気の重さ。美琴はもうギブアップを宣言したくなるまで追い詰められていた。

「（何よ、知り合いなのかと思った瞬間にこれって……いったいどういう仲なわけ？）」

黙っていても仕方がない、と美琴は何か喋ってみようとする。

「あの――」

「今まで……何をしていましたの？」

「ん？」

口を開いた途端、黒子のイライラとした声に遮られた。これはアタシが口を出す場面じゃないかな、と美琴は黙りこむことにする。

「今まで何をしていたのか、と聞いているんですの！」

「別に。普通に学校通って普通に生活して――普通に生きてきただけだ」

「なぜ連絡の一つも入れないんですの！私や初春がどれだけ心配したか……！」

初春さんも知り合いなんだ……と、美琴は以外に思う。初春さんはなんかこういう人とかと接点無さそうだけど、と。

「連絡無しは悪かった。でもオレはこの通り元気だ。お前も相変わらず元気そうだし。……初春も元気か？」

薄っぺらい微笑を浮かべて和真は答える。

「えぇ、元気ですわよ？もっとも、アナタが半年前にいなくなってからしばらくはふさぎこんでいましたけどね……」

お前のせいだと言わんばかりに和真を睨み付ける黒子。

「そうか……でも今は元気なんだろ？ならいい。充分だ」

「あの……『いなくなった』ってどういうこと？」

美琴はドギマギしながらも、どうしても好奇心を押さえられずに聞いた。ここ最近ずっと一緒に過ごしてきた黒子も、この磁力使いについては一言も触れることはなかった。そんな人に好奇心が湧くのは、少々仕方の無いことかもしれない。

黒子は少し答えにくそうな顔をし、若干顔をしかめながら口を開いた。

「この方は……黒瀬は、私たちと同じ風紀委員（ジャッジメント）でした。半年前にいきなり姿を消すまでは」

第三話　再戦

「風紀委員（ジャッジメント）だった？こいつが？」
「ええ、つい半年前まで。そして所属は一七七支部……」
「それって、アンタたちと同じ……」

美琴は驚きを隠せなかった。ジャッジメントというものは、本来入るのにもかなり長い期間を要する。目の前のやる気の無い男が、そんな努力をしてまで他人を助けるような人間には見えなかったのだ。そして何より気になったのが、

「それで途中でやめちゃったって、どういう……」

美琴は詳しくは知らなかったが、入るのに長い期間がいる風紀委員（ジャッジメント）から、そう簡単に抜けられるものだとはあまり考えられなかったのだ。何か特別な理由があったんじゃ……？そう勘ぐる美琴に、和真は無表情で言う。

「お前には関係の無い話だ。知る必要も無いし、知って欲しくもない」

勘ぐる必要はないぞ、と言い残し和真は回れ右をして帰ろうとする。しかしその動きを黒子は見逃さない。

「待ちなさい、初春に顔も出さずに帰るつもりですの？」
「……ああ」
「それはなぜ？」

美琴は和真の変貌ぶりにも驚いていた。昨日交戦した彼は冷静では

あったものの、もっと明るくひょうきんな人物に見えた。しかし今の彼は――

「今更どの面下げて会いに行けるんだ？お前が言った通りオレは半年間音信不通だった。もうお前らには会いたくなかった。資料が支部に残ってたから住所も変えたし、学校の帰りなんかでも必ずお前らには会わないように注意を払った。そんなことする奴がどんな顔して会いに行くんだ？」

今の彼の顔には自嘲的な笑みか悲しそうな微笑しか表れていない。自分の不幸を笑うような・・・・いや、自分を幸せを消してしまおうとしているかのような顔だった。対する黒子は歯をギリギリと噛みしめ、今にも和真にとっつかみそうな顔をしている。

「それなら、無理矢理初春にも会ってもらうまでですの……！」

次の瞬間、黒子の姿は一瞬で消えていた。彼女の空間移動（テレポーテーション）を使ったのだろう。行き先は初春のいる風紀委員一七七支部。美琴に声もかけずに消えたあたり彼女も相当テンパっているに違いない。

「ビリー、オレは帰るぞ。黒子が初春連れて帰ってくるのも時間の問題だ。幸い一七七支部はこっから結構遠いけど――」

「何で逃げるのよ？会えばいいじゃない」

「残念ながらそういうわけにもいかない。オレもう決め……って、何の真似だ？」

美琴は和真の腕を掴んでいた。勿論和真を引き留める為である。正直美琴は自分が正しいことをしているのかわからなかったが、それ

でもさっきの黒子の表情をみて見過ごすことはできなかった。

「アンタは逃げてどうすんのよ？一生あの子たちを避け続けるつもり？そんなことを続けて――ってあれ？」

美琴の体は見えない力に押されるように、和真から引き離されていた。美琴が和真の顔を凝視すると、噛んだ口の端からまたも血が流れている。

「昨日と同じ……磁力ね」

「なんで黒子がオレを直接連れて行かなかったかわからないのか？レベルは5でも初戦はガキだな」

「く……昨日からちょいちょいバカにしてくれるわね。わかったわ。昨日の再戦も兼ねて勝負よ！私はアンタを引き留める！アンタは逃げるなり私を倒すなり好きにしなさい！」

言うなり美琴の頭から電撃が発せられる。対して和真は脱兎のごとく走り出し、逃走を開始した。

「待ちなさいっ！ちょこまか逃げんなっ！」

「いやいや、逃げないと死ぬからな？電撃が直撃しても動いてられるポテンシャルなんてないし」

自分より前方にある置物に電撃が直撃したのを見て和真はため息をつく。これは逃げ切れそうにないなぁ、と呟いて近くの河原に駆け下りた。障害物の少ない広場に出る。それは逃げることではなく戦うことを意味していた。

「何？戦う気になったワケ？」

「とっとと倒してとっとと帰る。そうすることに決めたんだよ」
「ふん。この私に向かって大きい口きいてくれるじゃない。レベル5でもないアンタがね」
「レベル5が何だ？4と一つしか変わらんだろ」

美琴が放つ電撃を右へ左へかわしながら和真は余裕な顔で喋る。本来電撃とは見てから避けられる速さではないが、和真は美琴の目線や体の動きから予測して軽々とかわす。その余裕の態度が美琴を更に挑発していることに美琴は気づいていない。

「そんな直線的な攻撃、狙いがわかりやすくてありがたいな。……時に御坂（ビリー）、磁気単極子（モノポール）って知ってるか？」
「はあ？えっと（ドオン！）……確か（ドオン！）……」
「……待ってる暇がないからオレから説明するか。簡単に言えば片方の極だけを持つ仮想上の粒子だ。まだ現実には見つかってはいないんだが……それをもし作れたらどうする？」
「そんなの（ドオン！）……知らないわよっ！（ドオン！）」
「そんなにドンドン電撃撃たなくてもよくないか？会話の途中で……」

和真は後ろに下がろうとして橋の柱にぶつかる。もう逃げ場は無いわよ？と勝ち誇った顔の美琴。しかし和真はまだ余裕な顔である。

「じゃあ質問を変えよう。もしお前の体と周りにある全ての石を違う極にして、磁力を持たせればどうなると思う？」
「へ！？」

周りの小石がカタカタと動き始めた。これが何を意味しているのか美琴は直感的に理解する。冷や汗がツルリと頬を伝った。

「正解？もう言わなくてもわかるだろ」

周りの小石が一斉に美琴に襲いかかった。手加減でもしているのか石のスピードはあまり無いが、体中に石がくっついていては身動きはとれなくなるだろう。しかし美琴はまだ諦めていない。すぐに磁場を――

「ああ、言っておくがお前が磁力を変化させようとしても無駄だ。もともと磁力専門のオレと電撃専門のお前とじゃレベルを補って余りある差があるんでな。昨日とは逆だ。それに……」

和真は、足をとられて倒れ込んだ美琴を見下して言った。

「オレをただのレベル４だと思うなよ？」

第三話　再戦（後書き）

磁気単極子はもっと難しいものなみたいですが、この作品ではあくまでも片方の極のを持った物体、ということにしてます。

主人公設定（前書き）

今までに出ただいたいの設定です。でてない部分もありますが・・・。

主人公設定

黒瀬和真（くろせかずま）

身長１７４？　体重５４？　性別　男

当麻と同じ学校に通う高校生。当麻との付き合いは高校入学時から。当麻の上の部屋に住んでおり、そこまでたいした友好関係ではないが一応は友達と呼べるレベル。当麻に対しては少々尊敬のような感情を抱いており、自分が行動する時の見本などにしている節がある。また、当麻にも劣らない不幸体質であり可哀想な生活を日々送っている。元風紀委員（ジャッジメント）でもあり、黒子や初春とは結構古い仲の様子。しかし半年前にいきなり黒子たちの前から姿を消し、今もずっと接触を避け続けている。また、付き合いは長いものの黒子とは昔から馬が合わず基本的に仲は悪い。

能力

磁力操作（マグネティッカー）　レベル４

磁力を支配する能力。もともと磁力を持っていないもの同士に磁力を発生させて引きつけ合わせたり、自分と相手に発生させ反発させたりと凡用性が高い。レベル５に近い強さの能力だが、自分自身に磁力を作れずレベル４と判定されている。本人自覚で、能力発動時に唇を噛む癖がある。

磁気単極子（モノポール）

物体に片方の極だけの磁力を発生させる。使い方はいろいろとあるが後は本編で。

主人公設定（後書き）

主人公は基本的に、

能力の強さは一方通行に及ばず。

身体能力（ケンカのつよさ）は土御門に及ばず。

心の強さ（正義感）は当麻に及ばず。

負けん気は美琴に及ばず。

という何一つ突出してない微妙なお人です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0692ba/

とある科学の磁気単極《モノポール》

2012年1月2日22時50分発行